

大切にしたい、つなげていきたい思いがそこにはある…

きれいで、こんなんだった、こんなんだった

僕の住む町にはきれいな海岸がある。国立公園にも指定されているこの海岸の砂浜には松の木が立ち並び、前方は見渡す限り海である。訪れるたびに自然の雄大さを感じ、心が落ち着く。

自然の美しさだけでなく、人のあたたかさを感じる場所でもある。海岸に入っ
てまず目にはいるのは、松ぼっくりが並べられてつくられた道、通称、『まつぼっ
くりロード』。次の人にもきれいに使ってほしい、自然を大事にしてほしいという
願いから自然とまつぼっくりが並べられ、この道がつくられたそうだ。きれいに
整えられた『まつぼっくりロード』には、ほうきの目がきれいに入っている。足
跡をつけて汚さないようにと気をつけながら歩く。美しい自然と次の人への思い
やり。人のあたたかみを感じ、とてもいい気持ちになる。

僕の大好きな海岸。ここに立つと背筋がすっとのび、心が癒される。でもこの
海岸は、十数年前はとても汚かったそうだ。先日、環境を守る自然館の方に昔の
海岸の話をお話していただいた。

「昔は三歩歩くところまで汚かった。夜は若者のたまり場となっていてとても
危ない場所だったの。」

「えっ、信じられない」

自然館の方のお話にびっくりした。そんな海岸が今のように再生したのはある
若者の行動がきっかけだったという。

その若者は、昔からその土地に住んでいるお年寄りが海を見て、「昔はわっぜよ
かったよ。きれいでよかった。」と嘆いていることを知り、ごみ拾いを企画した。

一日がかりで海岸のごみを全部かたづけようと仲間と一緒によびかけた。遊び
に来ていた数人の小学生もボランティアで参加したという。その日、海岸清掃で
集められたごみは、トラックにのりきれないほどであったという。その後、毎日
夕方にボランティアでごみ拾いを続け、その日に出たごみはその日のうちに片付
けるようにしていったそうだ。だんだんと海岸はきれいになり、三、四ヶ月では
とんどごみがなくなったそうだ。

きれいになってからはごみを捨てる人も減り、最近では地域の方も定期的に清
掃活動に協力してくれているとのことだった。最初のごみ拾いにボランティアで
参加した小学生達は中学生になっても夕方のごみ拾いをすすんで手伝ってくれて
いたそうだ。

「一人の行動が海をきれいに。そしてその気持ち伝わって、協力、思いやりの
輪が広がっている…」

僕はこの話をきいてとてもうれしくなった。心があたたかくなった。自然館の
方は話を続けた。

「ごみを捨てることや捨てる人を責めない。それよりもみんながこの海岸を大事
にしていることを伝えたい、きれいなところに来て気持ちがいい、だからこの
環境を次の世代にも残したい」という気持ちで伝わっていくとうれしいよね。」
僕はその話になさずきながら、ふと思った。そういえば、海岸には『ごみは持
ち帰るように』という注意書きのある看板は一つもない。気持ちよく使ってほし
い、そんな利用者への心配り。その思いが自然と通じて、良い気持ちの連鎖、環
境を守るプラスの連鎖が起こっているのだ。僕はとてもうれしくなった。
「もっとうれしい話があるの。」

じっと考え込んでいた僕に、突然、自然館の方が言われた。

「ある日、雨の中、八十代ぐらいのおばあさんが連れ添いの方と海岸を見に来ら
れてね。こんな雨の日は何をしてきたのかと気になって、そっと連れ添いの方
に声をかけたの。そしたら、その方が言われるには、おばあさんは高齢のため
に施設に入ることにになり、どうしても最後に自分が幼い頃遊んだこの海岸を見
たいと言ったものだから。だから連れてきたの。自分も長いことここに来てい
ないからどうかなって思ったんだけど、あんまりしつこく言うし、施設に入る
と外に歩いて外の景色もなかなか見ることができないからと思って・・・。」
「そしたらね、じっと海岸をながめていたおばあさんが振り返って言ったの。目
には涙をうかべてね。」

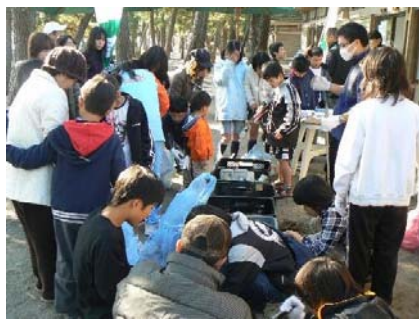
「きれい、こんなんだった、こんなんだった」って。

そして僕の胸はいろんな感情でいっぱいになった。



現在の海岸の様子

©くすの木自然館



ごみの清掃・分別



©くすの木自然館



まつぼっくりロード